

さいたま
見沼

よみさんぽ

2022

Vol. 41

まち歩き 9
自然と向き合い暮らしを
築いてきた人々

記録写真家 柿内未央

自然と向き合い暮らしを 築いてきた人々

まち歩きシリーズ、2022年度は街道に着目していきます。とはいっても、まち歩きに疎く、さいたま市のホームページを頼りに、まずは赤山街道（大宮道）。今の桜区あたりに住んでいた私は、大宮に向かう時、与野の赤山通りを使っていたので「あの辺りかな」と思うぐらいでしたが、探してみると見沼の治水を巡る歴史がありました。

伊奈氏がやってきた

江戸時代に入る少し前、1590（天正18）年に関東に移ってきた徳川家康に仕えていた伊奈忠次い なたつぐが、現在の伊奈町小室に陣屋を築きました。忠次と長男忠政ただまさは関ヶ原の戦いに参戦しています。忠次は農政に明るく、家康から信頼され代官頭を務め、また「備前守」とも呼ばれ、忠次が整備したとされる「備前」の名がついた水路や堤防が各地に残っています。

忠次が亡くなると、忠政が跡取りとして家を、次男忠治ただはるが代官（将軍に代わって幕府の領地を支配する役人）の仕事を受け継ぎました。忠治が拠点にしたのが川口の赤山という地。この赤山陣屋と忠次・忠治のゆかりある西区の土屋陣屋を結んだ道が赤山街道、ということらしい。川口生まれの私は、あの赤山とこの赤山通りがつながっていたとは、と驚いたり、さいたま市ができる前にYou&I プラン（与野・大宮・浦和&伊奈）というものがあって、「何で伊奈が入るの？」と思っていたことが全くの歴史認識不足だったと知りました。

伊奈忠治を訪ねて

忠治は、赤芝山という山を切り開き1629（寛永6）年に赤山陣屋を完成させました。現在も空堀や土塁が残っており、陣屋一角にある赤山歴史自然公園（イイナパーク川口）には、遊ぶ子どもたちを見守るように伊奈忠治像が佇んでいます。

川口市立郷土資料館で伊奈忠治の企画展が開かれていたので訪ねてみました。忠治は、水路や道、宿場を各地に整備しました。驚いたのは荒川や利根川を動かしていたこと。例えば荒川は、現在の元荒川を流れていたのを熊谷のあたりで締め切る堤を築き、流れを変えました（荒川西遷せいせん）。これによって元

荒川や綾瀬川の水害が減り、荒川の水量が増えて船の行き来が盛んになり、秩父の木材なども運ばれるようになりました。また、下流に豊富な川砂をもたらし、砂型を用いた川口鑄物の発展にもつながったと考えられています。前後して、見沼溜井、赤山街道、中山道、日光御成街道など大宮台地周辺の開発が進展していきます。東京湾に流れていた利根川が太平洋に流れるルートに動かされていたことも初めて知りました（利根川東遷）。伊奈氏の業績を辿ることで、人々が自然に向き合いながら、知恵と労力を費やし暮らしの土台を築いてきたことがわかります。



赤山城址跡

見沼田んぼの前身・見沼溜井

伊奈氏代々のお墓がある源長寺にお参りし、赤山陣屋に戻ります。東京外環自動車道と東北自動車道の交差する川口ジャンクションの東南側あたり、陣屋には新町口、越ヶ谷口、安行口、鳩ヶ谷口があって、そこから大宮道、越ヶ谷道、千住道（足立方面）が作られていました。大宮道は、外環自動車道、国道122号を越えて東浦和駅に向かいます。私はウン十年前、通学でここを原付で走っていました。今は広いバイパスもできていますが、こちらの道は細くよく渋滞していました。

芝川にかかる八丁橋、江戸時代（1629年）、忠治がここに八丁堤を築きました。大宮一帯に広がる台地の谷間に見沼という大きな自然の沼がありました。これに八丁（約870m）の堤を築き川の流れを堰き止め、見沼をダム湖にしたのです（見沼溜井みぬまためい）。それから約100年後、徳川吉宗の命で井沢弥惣兵衛為永が1,200ヘクタールにも及ぶ見沼溜井を干拓し、見沼田んぼができました。この田んぼには、利根川から約60kmに及ぶ堀を築いて見沼代用水を引きました。この辺りでは、芝川・荒川と見沼代用水の水運をつなぐ見沼通船堀や水神社、見沼干拓事業に参加し通船業務を行った清水家、附島氷川女体神社など散策できます。

水神を祀る

東浦和駅前を過ぎて右手に折れると大間木氷川神社があります。1667（寛文

6) 年に大宮の武蔵国一宮氷川神社の造り替えの際に旧本殿を買い受けて建立したそうです。それにしても氷川神社のなんと多いこと。それだけ川の氾濫などに暮らしが左右され水の恵みを祈ったのだと感じます。大宮氷川神社も広大にあった見沼の畔にあり、もとは見沼の水神を祀っていたと考えられているそうです。ちなみに家康が関東に入った時に忠次が大宮氷川神社の社頭を造営しました。江戸時代初期には、氷川参道に中山道がかかっていましたが、これを恐れ多いと宿の人たちの意見を受け、現在の位置に移動させたのが忠治だそうです。

馴染みある通りの傍に

463号を過ぎて三室付近を通り、産業道路を渡って上木崎の赤山通り商店街が、あるらしいのですが……。『よみさんぽ』編集委員から教わった、タウン誌「浦和」1979年8月号(No.124)には、「わたあめ、いかやき、とうもろこし、そして金魚すくい、かぶとむし、さわがになど色とりどりの出店にちびっ子たちの歓声が夏の夜空にひびく」と賑わう「ちびっこ天国」の記事が紹介されていました。私も幼かった頃、こうした縁日を楽しんでいました。近所だったら行っただろうな。

与野駅前を過ぎて新都心大橋でJR線を跨ぎます。かつて与野橋と呼んでいましたが、新都心周辺開発でしばらく使えなかった時はとても不便でした。国道17号に降り切る前に、ビバホームの裏あたりに入って与野東中学校と下落合小学校の間を行きます。その道と17号の交差点が「赤山通り」、ようやく私にとって馴染みのある「赤山通り」になります。埼京線の高架下を通過して鴻沼

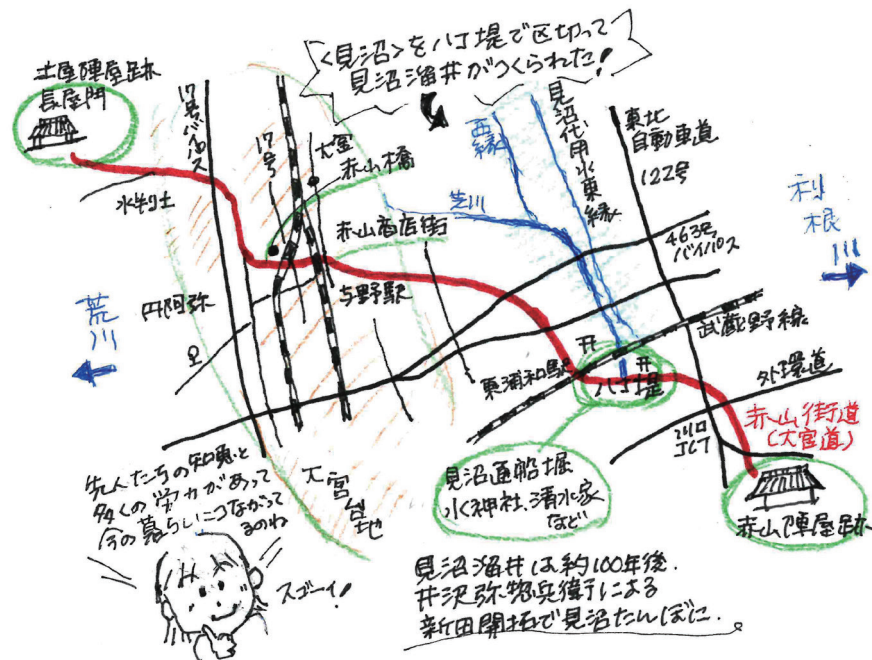


永田屋長屋門(市指定有形文化財)

川にかかる赤山橋の袂に、1726(享保11)年に建立された石橋供養塔があります。よく見かけていた塔ですが300年近く前に建てられていたとは……

先人たちの偉業を伝える

本町通りを過ぎて新大宮バイパスの「赤山通り」交差点を抜けると円阿弥に入ります。ここに伊奈氏の円阿弥陣屋跡「御



屋敷山」があるようです。南下したところのバス通りに、「陣屋」というバス停があったのを思い出しました。今は住宅街になっていますが、この辺り一体に陣屋が築かれていたのかと思います。馳せませう。

水判土という広い交差点を抜け、だんだんと河川敷の景色を感じるようになり、土屋陣屋の跡に辿り着きます。馬宮コミュニティセンター向かい、「永田医院」の看板を目指して立ち入ると、忠次が荒川の改修・新田開発を行うために構えた「土屋陣屋」の長屋門が静かに佇んでいます。まるでタイムスリップしたかのよう。門を仰ぐと時代劇で見たような籠が2基吊るされていて、しげしげと眺めてしまいました。現在は個人所有で見学は可能とのこと。周囲を巡らせている堀も手入れされていて、大事に維持されていることが伝わります。

ここで今回の小さな旅は終点。私が出た時々に通っていた道が1つの道につながっていたこと、自然と向き合い、共に暮らしを築いてきた人たちに驚きと感謝の思いが湧いた旅となりました。(記・イラスト 永瀬恵美子)

さいたま市ホームページ>グラフ誌版広報誌「楽楽さいたま」
秋葉一男・青木義脩編：埼玉ふるさと散歩 さいたま市、2003年
川口市教育委員会文化財課：歴史絵本 伊奈☆忠治、2022年
街道歩き旅.com > 歴史街道あるき旅

『京都ぎらい』と『忍びの滋賀』に“なんで埼玉?”

並木せつ子



『京都ぎらい』 (朝日新聞出版 2015年)の帯より
『忍びの滋賀』 (小学館 2019年)の帯より

『京都ぎらい』の著者・井上章一は京都の嵯峨で育ち、今も宇治に暮らす京都人。それなのに「京都ぎらい」なのは、京（洛中）の人には“京都と言えるのは洛中だけ”という考えが根強く、「嵯峨は京都とちがうんやで」とさげすまれてきたからだとか。東山が西に見えるような山科も嵯峨同様によそ者扱い——どうやら他県の人にわからない序列があるようです。困ったことに、いつのまにか著者の心にもこの序列意識が忍びこみ、気がつけば、嵯峨よりさらに京から遠い亀岡を差別していました。「京都人のえらそうな腹のうちを暴露」という意気込みとは裏腹に、行間から京都への愛と誇りが垣間見えて、読み終えるころには著者が「京都ぎらい」ではないことに気づかされます。

『忍びの滋賀』の姫野カオルコは、出身地を聞かれたとき、「シガ」と答えても「佐賀」や「千葉」と勘違いされたり、「京都の隣の県」と場所を説明しなければならなかったり、忘れられがちな県だとなげきます。『京都ぎらい』の井上氏に対しては、洛外育ちの悲哀を語っているが「京都は滋賀県の隣」と説明しなければならないような目にあったことはあるまいと反論。さらに2008年のJR東海のCMにも一言。比叡山延暦寺（住所は滋賀県）の映像を使うなら「そうだ京都、行こう」ではなく「そうだ滋賀、行こう」にすべきだと。「いつも京都の日陰で」忍んできた滋賀県の悲哀を訴える本です。

この2冊の中に埼玉県人として気になる文章がありました。『京都ぎらい』には「東京人が千葉や埼玉を愚弄することも、ゆるされる範囲」／『忍びの滋賀』には「滋賀県が埼玉のようにダサイとおっしゃるか」（傍点筆者）／——唐突に埼玉県が出てくるのです。反論はしませんが、なんの関係も無いところで、いちいち引き合いに出すのは“やめてくらっせ”。

連載

埼玉の方言

「なにげに」身に付いているアクセント

私の両親は熊本県天草出身で、帰省すると聞き慣れない言葉が飛び交っていた。私自身も岡山や愛知で暮らした時期があり、その土地の方言に触れて育った。就職を機に大宮にきた時は、周囲で訛りや方言が感じられず、新鮮に感じていた。この連載のテーマを聞き、正直「埼玉に方言ってあるの?！」と思ったが、調べてみると、埼玉で暮らす人たちも気づいていない方言があるようだ。

関東の1都6県に囲まれた埼玉は、その地域によって隣接する地域の影響を受けているため、方言にも違いがあるという。もともと埼玉は東京都と同じ武蔵野国。さいたま市がある県南部は東京に近く、江戸言葉の影響を受けており、言葉そのものというより、アクセントやイントネーションなどの違いも少なくないそうだ。もともと標準語と縁が薄く、自分自身のイントネーションも怪しい私が、埼玉弁に気づかないのはそういうことかと納得。

我が家の息子が保育園～小学生だった頃、自分のことを「オレ」と言い始めた。「一丁前に……」と微笑ましく思ったが、その言い方は「オ」にアクセントが付いた「オレ」。このアクセントも埼玉流の1つらしい。生まれも育ちも埼玉な息子、いつの間にか埼玉弁が身に付いていたようだ。

もちろん、埼玉の方言とされる言葉も多くある。もともと埼玉の方言だが、そこから全国に広がっている言葉もあるとのこと。若者言葉として使われている「なにげに」という言葉も実は埼玉の方言だそうで、年配の方も昔から普通に使っていたらしい。もともとは「何気なく・さりげなく」という意味で用いられていたが、最近は「思ったよりもいい」という意味で使われることが多いようだ。

今号より「埼玉の方言」として連載が始まる。当たり前に使すぎていて方言だと気づかない、標準語として全国の人が使っているけれど、実は埼玉の方言だった、なんて言葉に出会える予感。埼玉の方言って何があるんだろう? と思っていたけど、探してみると「なにげに」面白いのかも?！（記 宗野 文）

参考文献：「埼玉のことば 県北版」篠田勝夫 さきたま出版

街の小さな公園

小さな公園

建物が密集する下町にあった近所の公園は狭く、キャッチボールもサッカーのパス回しもできないような広さでした。公園の中には段差があり、狭いくせに滑り台やベンチがあるからおさらです。しかし、そんな環境だからできるようなオリジナルの遊びを発明して楽しんでいた子供時代の思い出があります。今になって、その不合理な形になった理由を知りたくなり公園に行ってみました。

児童遊園

一口に公園と言っても、行政の制度の中では様々な種類があるようで、私が身近に感じていた小さな公園は「児童遊園」というものに分類されるものらしい。広さは、郊外であれば住宅一軒分ぐらいで、子供の遊び場として地元住民と行政と共同で維持管理されているものが多いようです。公園によって広さは様々で、配置できる遊具も限りがあります。代表的なものは砂場と滑り台とベンチですが、広さ故か差別化を求めた結果か、オブジェや噴水など他のものが配置されている例もあり、なかなか個性的で比較すると楽しいものでした。

大人の事情

児童遊園をいくつか巡ってみて知ったのは、その形をもたらした事情です。ひな壇のように奥に行くに従って段差がついている公園には、防火用の地下水槽が埋められています。私道との境にフェンスが張られているのは、所有者からの理解が得られなかったのでしょうか？ 皮肉なのは、子供が遊ぶ姿よりも、おじいちゃんやおばあちゃんが日向ぼっこする姿を見かけることのほうが多かったこと。夜には、家では家族の目が気になるからか、学生がスマホで会話している姿や、サラリーマンがお疲れ様の一杯を飲んでいる姿を見かけます。

それぞれの行為に賛否はあるかもしれませんが、理解できるところもあります。公園巡りは、居場所を必要としている人が様々にいることに気がつく機会になりました。



とまつりしゅんいちろう
都祭俊一郎

1975年生まれ。生まれも育ちも、東京の下町。
エンジュの新築の他、保育園や幼稚園の設計（新築及び改修）
を複数行う。（写真 新 良太）





未来を拓く

つなぐ・つくるプロジェクト・9



音楽と聞き手をつなぎ、創造的に活動する

プロジェクトには、さまざまな人たちがボランティアで関わっています。今回からはともに活動する“人”に注目し、ご紹介していきます。トップバッターは佐藤史子さん。佐藤さんは日頃、若年性認知症の人や生活困窮者支援の活動に携わっており、プロジェクトでは地域巡回「旅するお茶の間」でフルートを披露してくださっています。佐藤さんがどんな思いで活動しているのか、これまでの経緯も含めご紹介します。

揺るぎない信念をもって

佐藤さんとプロジェクトとの出会いは、プロジェクトが始まった2020年春頃。会議にゲストスピーカーとしてお越しいただき、若年性認知症の人たちの支援活動についてお話しいただいた時になります。第一印象は、雰囲気は温かく柔らかい人。しかし、お話を聞いてみると、制度の狭間にある人たちの支援現場でないものがあれば自分たちで創ってこうと、柔らかい中にも揺るぎない信念があることを感じました。「ないものはないであきらめません。絶対に誰かにつなぎます」と佐藤さん。その思いに共感すること然りです。

佐藤さんは施設で勤務した後、高齢者の介護現場で経験を積みます。しかし、次第に介護保険や医療保険の中で対応できる人たちだけでなく、制度や仕組みからこぼれてしまう人たちの存在を知り、若年性認知症や生活困窮者の支援に携わり始め、現在も支援活動に日々奮闘されています。

「当時、風呂がない、冷蔵庫がない、洗濯機がない、そんな状況の中で日々必死に暮らしている人がいるということがショックでした。社会の裾野の広さを感じて、まだまだ見えていない困難な状態に置かれている人たちがたくさんいることを感じました。そもそも住民票あつての住民サービス、申請あつての福祉サービスという前提に立てない人たちがいます。社会の偏見や自分自身への偏見によって、福祉サービスや必要な情報にたどり着けない人たちがいるの

です。何のための制度なんでしょう」と、疑問を投げかけます。「社会の歪みが生んだ格差に巻き込まれ、自分が悪いんだと思っている人たちに、あなたのせいではないと伝えていきたい。声を上げて変わっていくこともあります。いろいろな手段を通じて社会に訴えていきたい」。彼女の原動力は、困難な状況にある人たちを置き去りにしない社会を創っていきたいというブレない思いです。



立場性を越えた活動が人と人との関係を創る

現在、プロジェクトで始まっている地域巡回「旅するお茶の間」。新たな出会いとつながりを創り出そうと、ある時はヤギが、ある時は音楽が、人々が集う居場所づくりに一役買っています。佐藤さんは地域巡回でいつもフルートの優しい音色を響かせてくださっています。演奏に合わせてみんなで口ずさんだり、リクエストに応えたり、音楽とともにある空間には心地よい時間が流れます。

彼女は音楽大学出身。音楽を活かして文化活動を進めたいと、若年性認知症の当事者と埼玉県作業療法士会の有志で集まったメンバーの「これでいいのだバンド」に参加しています。浦和駅前で演奏を披露するなど音楽と聞き手をつなぎ、音楽を真ん中に人と人がつながるようにとの思いで活動を進めています。

「何かひとつでも、どこかに、何かと、誰かとつながれることが大切。得意なことでもつながれる機会が必要です。ピアノが得意な人と音楽が好きな人がつながれるような情報を発信していきたい。自信がない人たちに、そうじゃないと思ってもらえるつながりが大切だと思います。支援の現場では、どうしても支援する側とされる側の立場になってしまいます。音楽と一緒に楽しんでいる時は、みんな立場が一緒になれる。立場性を越えられる活動が、人と人との関係の中では大事です」

私たちは日々、仕事でも家庭でもいろいろな役割を担い暮らしています。そんな役割をいったん横におき、立場性を越えて時間と空間をともにする活動の中で生まれるつながりがあります。佐藤さんと出会ったのもご縁。このご縁を宝物にしながら、音楽を真ん中にこれからも地域を巡ります。(記 三石麻友美)

ヤギ日誌

喜々・楽々の“食”のはなし



2頭のヤギ、^{きき}喜々と^{らく}楽々がさいたまにやってきてまもなく1年が経ちます。はじめは人が近づくと猛ダッシュで逃げ回っていた喜々・楽々も今では人に慣れ、「つながるくんカフェ」とともに地域のあちこちに出向いて人々に癒しのひと時を与えてくれています。いつもおいしそうに何かを食べている様子の喜々と楽々。今回は食をテーマに喜々・楽々のことをお伝えしたいと思います。

エサとウンチと微生物と

エサ台に入っているのはチモシーというイネ科植物の一種を乾燥させたものです。イネ科植物の中でも繊維質が多く、一度飲み込んで戻して再咀嚼（反芻）することで乾草を細かくし、唾液をたくさん分泌することで胃内の微生物による発酵を促します。この発酵によって、草しか食べていなくてもヤギは必要な栄養を摂ることができています。

1日1回、濃厚飼料（穀物由来の配合飼料）を与えています。栄養価が高い

うえに喜々・楽々にとってとても美味しいようで、一心不乱に食べます。ですが、食べ過ぎてしまうとおなかの調子を崩してしまい、本来コロコロのはずのウンチが軟便になってしまいます。日々のウンチの状態やヤギの様子を観察しながら、与え過ぎには注意が必要です。



本能のままに

濃厚飼料やイタリアンライグラスなどの生草を与えた時には、ものすごい勢いで食べています。特に喜々は“グウグウ”と喉を鳴らし、楽々が食べている横から頭突きをして、「全部自分が食べてやる」と言わんばかりに奪うように食べます。楽々も負けじと食べ続けます。エサ台を挟んで正面にいる喜々に頭突きをされながら……

ヤギは草食動物です。喜々・楽々のように安全な飼育環境にあったとしても、肉食動物に襲われる危険から回避するための能力が備わっています。そのため、たとえ仲が良くても目の前にエサがあれば取り合うように食べますし、聞き馴染みのない音には敏感に反応し、いつでも逃げられるように準備をします。一見、怖がりのようにも見えますが、怖がりなのも野生動物の世界においては生き残る術なのだと思います。

ヤギは過酷な環境でも生きていくために色々なものを食べますが、実は好き嫌いがはっきりしているそうです。好きなものは最後に取りしておくのではなく最初に食べます。喜々・楽々もそうです。自生している植物であれば自分たちで選んで食べますが、人に慣れてくると差し出されたものは何でも食べてしまうので、食べてはいけないものを与えないように注意が必要です。

いつも同じものばかり食べていては喜々・楽々も飽きてしまいます。ヤギも人間も同じなんだと思います。今年度もつなぐ・つくるプロジェクトで地域をめぐりながら、喜々・楽々には各地に生えているご当地グルメも味わってもらえたら嬉しいです。

（記 伊藤 侑矢）



人と人とのつながりで
安心安全な未来へ向けたまちづくりを



清掃スタッフ
募集中!!
▲応募はこちら

M 今日も 明日も そっと。
毎日興業株式会社

〒330-0842 埼玉県さいたま市大宮区浅間町2-244-1
TEL : 0120-156365 (フリーダイヤル) <https://www.mainichikogyo.co.jp>

芝川やぎ部の応援グッズ

芝川やぎ部は、ヤギをお世話することを通して、人と人との笑顔で交流をし、地域や社会がより良いものとなることを目的として発足しました。グッズの売上の一部と応援チケットの諸経費を抜いた収益は、ヤギさんのお薬や小屋の手入れなどに使わせていただきます。地域に癒やしを与えてくれるヤギ活動をぜひ応援ください!

芝川やぎ部応援グッズ好評発売中!!
こちらから⇒



求ム!!
軽トラ



つなぐ・つくるプロジェクトでは、“ひとりぼっちを作らない”～つながる場づくり～の取り組みとして、キッチンカーを活用して地域を巡回していきたい...と思っています
軽トラの荷台に“キッチン”と人と人とのつながる“希望”を載せて街を走りたい!

その実現のために使っていない軽トラがありましたらお譲りください
※不動産などお断りさせていただく場合もあります

問い合わせ先: 田中(喫茶ルポーズ) 048-657-0202

片柳地区社会福祉協議会

つながりを大切に活動しています

048 (686) 8601
開設時間
月曜日～金曜日
10時から16時




援農ボランティア募集中
やどかり農園 (無肥料・自然栽培)



さいたま市見沼区染谷 1177-4
Tel 048-680-1891

◆やどかりの里正職員募集

やどかりの里では、正職員(精神保健福祉士、社会福祉士)を募集しています。
詳しくはやどかりの里法人事務局までご連絡下さい。
お問い合わせ) やどかりの里法人事務局 048 (686) 0494

◆高齢者向け弁当の調理補助のパートさんを募集しています

8:30～16:30
月～金曜日(日数、曜日について応相談)
時給970円【お問い合わせ】048 (686) 7875 (金子)
(月～金・祝日を除く、8:30～17:30 受付)
エンジュ 〒337-0042 さいたま市見沼区南中野 286-1



すべての人々が人間らしく豊かに育ちあえる地域づくりをすすめるために
こうぬまふくしかい

社会福祉法人 鴻沼福祉社会

こころを込めた手づくりの品をぜひ一度お試しください

TEL 048-854-8000
FAX 048-854-3538
さいたま市中央区上峰2-10-20

どうふ屋 いちず



つばさ共同作業所とそめや共同作業所が手がける、国産・手づくりこだわった本格とうふ。
宮城県産高級大豆「ミヤギシロメ」を100%使用し、オリジナル惣菜も人気です。
大豆本来の濃厚な甘さとコクを味わえる“小さなぜいたく”を食卓にお届けします。

きりしきのパン TEL 048-854-6910
FAX 048-854-6942
さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内

きりしき共同作業所のパンは食の安全・安心にこだわり、原材料に国産小麦粉を使用しています。(一部商品を除く)
職人とともに手がけるパンは、少し懐かしい味と香りがします。



弁当屋 いちず
TEL・FAX 048-684-1257 さいたま市見沼区染谷2-145

そめや共同作業所のお弁当は旬を感じる手づくり弁当です。
野菜をたくさん取り入れ、手が込んでいると女性に大人気です。



鴻沼福祉社会から読者の皆様へ

○鴻沼福祉社会では、袋詰め・部品組み立て作業や清掃作業、資源回収など、地域の企業様のニーズに応えるべく様々な仕事を受注しています。働くことをおとして障害のある人がさらに輝けるチャンスを求めて新しい仕事にもチャレンジしつづけています。

○障害のある人たちの就労支援、生活支援、相談支援のスタッフを募集しています! 問い合わせ先: 048-854-6890 (担当オガワ)

鴻沼福祉社会事業所一覧

●本部・事務局 埼玉県さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内 TEL: 048-854-6890 FAX: 048-856-0313

《はたらく》●つばさ共同作業所(中央区) ●あざみ共同作業所(見沼区) ●そめや共同作業所(見沼区) ●きりしき共同作業所(中央区)
《くらす》●第1たかさご荘 ●第2たかさご荘 ●第3たかさご荘 ●かえでホーム ●かりんホーム ●よつばハイツ
●なつめホーム(以上、中央区) ●のぞみホーム(見沼区) ●ひかりホーム(西区)

《ささえあう》●中央区障害者生活支援センター来夢 ●地域活動支援センター来夢(以上、中央区)
●見沼区障害者生活支援センター来人(見沼区)

さいたま見沼よみさんぽ

作者紹介

記録写真家 柿内未央さん(表紙写真)

“人としていかに生きるか”について考えるなかで、平和の基盤は自然との共生にあると痛感し、埼玉県明石農園にて自然栽培を学ぶ。

生かされていること、全ての本質が等しくつながり合っていることを感受してから世界が変わり、その一部として生きたいと思うように。

自然とヒト・人と人をむすぶお手伝いがしたく、“自然とヒト”…いのちの記録をメインに活動している。

ホームページ <https://lit.link/kakiuchimio>

表紙写真によせて

先日、矢野智徳さんの“大地の再生”講座に参加させていただき、特集と矢野さんの言葉が重なりました。

「人と自然が豊かに暮らせる環境は、大地の血管である水脈を大切にすることから。」

その視点と技術を培ってきた歴史が日本にはあり、江戸時代ではどの集落でも空気と水が循環し産物が豊かに生み出され、経済も街道および宿場町から限界集落まで脈機能として繋がっていた。」

神社も、水脈……地域の人々の暮らしの要となるところに建てられていた。感謝の気持ちを祈りにのせてー。

自然とともに豊かに暮らしていた先人の知恵や想いを、次の世代へと繋いでいきたい。(柿内未央)

よみさんぽバックナンバーはこちらから
ご覧いただけます



公益社団法人やどかりの里



<https://www.yadokarinosato.org/kouhou/yomisanpo/>

さいたま見沼よみさんぽ 第41号

発行 2022年4月

編集 「さいたま見沼よみさんぽ」編集委員会

〒337-0026 さいたま市見沼区染谷
1177-4

Tel 048-680-1891 Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinosato.org

<https://www.yadokarinosato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里

理事長 増田一世

印刷所 やどかり印刷



公益社団法人やどかりの里

やどかり出版



公益社団法人やどかりの里は、この大宮見沼界隈で障害のある人たちとともに地域で生きることを目指して活動を続けています。私たちは長年この地域で活動し、地域の皆さんに支えていただけてきました。

そして、この地域の人々が織りなしてきた歴史・文化、守り育ててきた自然、地域に根づいた事業等々をもっと知りたいたい思うようになりました。合わせて、やどかりの里のことも皆さんにもっともっと知っていただきたいと「大宮見沼よみさんぽ」を創刊いたしました。またこの度、広く地域情報をお届けするため「さいたま見沼よみさんぽ」と改題致しました。

「さいたま見沼よみさんぽ」編集委員一同